中村順平記述史料－中村順平直筆ノートを中心として－

林　要次

１．はじめに

中村順平（1887-1977）は、フランスのエコール・デ・ボザールの建築セクションに学び、日本人建築家として初めてその修了証書を持ち帰った人物である。中村は、帰国の翌年 1925 年より横浜高等工業学校建築学科（現、横浜国立大学都市科学部建築学科）で教鞭を執った。中村が牽引した横浜での建築教育は近代日本建築史上の特異点として語られてきた。中村は横浜での教育を端緒とする「建築学」の学体系によって日本芸術院賞を受賞した近代日本を代表する建築教育者であった。日本芸術院の選考委員が着目した中村の「建築学」体系の根幹にはフランスの建築理論やその他フランスの文献が据えられていた。

本研究目的は､近代日本の建築教育の一端を担った中村順平の建築学体系をより明確にするため、大阪歴史博物館蔵の中村の直筆ノート群を分析し、中村の基幹理論の一端を詳らかにすることである。本稿では、中村直筆ノート群の整理およびアイディアの源泉をフランス文献との関係からあぶりだし、これまで取り上げられることのなかった文献や研究成果などの存在を明らかにする。

２．大阪歴史博物館蔵の中村教育資料

大阪歴史博物館所蔵の「中村順平資料」には、中村が教鞭を執った横浜高等工業学校の教育史料が含まれている。大阪歴史博物館蔵の中村教育資料は、中村が在職期間を通じて主に担当した２つの科目―「実習」と称された設計製図科目と座学「建築学」と称された理論科目[註1)]―と関連が深く、それらは図面史料群と記述史料群に大別できる。館蔵図面資料の大半は、「実習」科目の成果である学生たちの「建築図画」や課題提出図面が占めている[註2)]。一方の記述資料群は、座学関連資料や中村の直筆ノートや草稿で構成されている。後者の記述資料の研究は管見の限り発展途上の分野である。

横浜高等工業学校建築学科第１回卒業生である建築家・網戸武夫の著書『情念の幾何学』（建築知識、1985（参考文献 1））において、網戸は中村が目指した建築学体系の将来像を述べ、中村の未定稿の草稿類の存在に触れている。網戸が指摘するように、中村の学体系の代表格は２つの著述『建築学』と『建築という芸術』（彰国社、1959）であり、前者は 1944 年に刊行された『建築学総説篇』（土木出版社、1944）や 1950 年に刊行された『建築学技術篇』（中村塾出版会、1950）だけでなく、建築の諸要素から環境篇、都市篇、教育編と巻を重ねる構想であったという[註3)]が、網戸はその内容の具体まで言及していない。筆者は以前、この内容の具体を明らかにするため、中村の「『建築学』草稿」ノート[註4)]を対象に分析し、中村の既往研究では未開拓分野であった草稿とフランス語文献との関係を見出した。筆者は、この発見から中村の近代日本におけるフランス建築理論

の受容の一端を解明し、横浜国立大学に提出した学位請求論文（参考文献 2）にまとめたが、未だ中村の建築学体系の理論基盤の全体像の把握には至っていない。

大阪歴史博物館所蔵の中村の記述資料は、雑誌連載の論考原稿や草稿、講義用に作成されたと思われる座学関連資料が中心を占めている。これらに加え、中村の直筆ノート類も収蔵されている。こうした記述資料群はいわば中村の建築思想の形成に寄与した資料群といえ、詳細な分析が必要だろう。雑誌『建築世界』誌上に連載された論考[註5)]は、横浜で行われた中村の座学「建築学」の講義録の一部といわれ、その他の記述資料も横浜の講義とのつながりが考えられる。

大阪歴史博物館所蔵の記述資料は、中村の死後弟子や教え子たちにより設立された桧の会の会長を務めた松本陽一（1942 年卒）からの平成 18 年度、平成 25 年度、平成 27 年度の 3 度の寄贈品および歌嵜昌太（1936 年卒）の親族からの平成 25 年度の寄贈品に含まれている。本稿で対象とする中村の直筆ノート群は松本からの寄贈品を主な対象とし、歌嵜家寄贈の「PROF. NAKAMURA'S NOTE 6」が松本から寄贈された「『建築学』草稿」ノートのコピーであったことから分析対象から除外した。

松本からの寄贈品における記述資料群は、既刊の『建築世界』誌上で連載された「建築学」の一部や『建築学技術篇』並びに『建築という芸術』の原稿群と直筆ノートを含む未定稿の草稿群に大別できる。

原稿群の一翼は、1925 年 7 月号から 1937 年 2 月号にかけて不定期ではあるが雑誌『建築世界』誌に連載された「建築学」の一部が担っている。この連載は座学の講義録としての位置づけでもある。約 12 年間にわたる連載期間で掲載された総ページ数は 886 頁であった。これらは「建築学第一巻」から始まり「建築学第五巻」の途中でその連載は終了した。「建築学第一巻」は「予備研究」、「建築学第二巻」は「一般原則」、「建築学第三巻」から「建築学第五巻」までは「建築之諸要素」と題され、「予備研究」と「一般原則」部分が改訂され 1944 年に土木出版社より『建築学総説篇』が発刊された。

『建築学総説篇』では、中島久男が指摘するように[註6)]パリのエコール・デ・ボザールにおいて 1894 年から 1908 年にかけて建築理論の教鞭をとった建築家ジュリアン・ガデ Julien Guadet（1834-1908）の建築理論書『建築の諸要素と理論 *Eléments et théorie de l'architecture*』（参考文献 6）（初版、1901 ～ 1904）の構成が意識されている。筆者の別稿[註7)]で指摘したように、『建築学総説篇』は、中村がエコール・デ・ボザール留学中に受講した建築家で技術者のエドワー・アルノー Edouard Arnaud（1864-1943）の講義「コンストリュクション Construction」の講義録『建築・建設土木講義 *Cours d'architecture et de construction civile*』（参考文献 3）（初版、1920）との関係も見いだせ、当時のフランスの建築理論、特にパリのエコール・デ・ボザール教育と関係の深い書物である。

『建築学技術篇』もまた、19 世紀のエコール・デ・ボザール建築理論を代表するイポリット・テーヌ Hippolyte Adolphe Taine（1828-1893）やヴィオレ・ル・デュク Eugène Emmanuel Viollet-le-Duc（1814-1879）らの理論の参照が確認できる。一方、『建築という芸術』では日本建築を対象とした論が展開されており、前述の 2 つの書物とは様相が異なっている。

３．大阪歴史博物館蔵の記述史料の草稿群

大阪歴史博物館蔵の記述資料の草稿群は、糸綴じノート、一枚一枚のノートを束ねハードカバーで綴じた合紙綴じ製本ノート、ダブルリング綴じノートの３種に大別できる。館蔵資料には表１の17冊のノートが存在した。なお、合紙綴じ製本ノートの表題は管理上の名称であるが、その他は表紙に記載された表題を記載した。網戸が述べるように[註8)]、これらのノートは「建築学」の壮大な構想を実現するための草稿の可能性があり、中村が講義用の草稿を書き続けていたのであれば、草稿ノート群にはいくつかの書物をベースとして古今東西の歴史的な事象や各時代の歴史や講義に登場する人物、建築プログラムに関する内容を残していた可能性が考えられる。仮に『建築学総説篇』や『建築学技術篇』との制作年代の近接性があるならばフランス理論との関係も考えられる。本稿の分析対象は、表１の直筆ノートから、筆者が既に学位請求論文（参考文献２）で論じた「『建築学』草稿①」と「『建築学』草稿②」を除く計15冊とした。本研究での分析対象とした15冊の直筆ノートの表紙写真の一覧を表２にまとめた。

表１　大阪歴史博物館蔵中村直筆ノートリスト

	A. 糸綴じノート	B. 合紙綴じ製本ノート	C. ダブルリング綴じノート
1	Arnaud	東洋	V_Architecture chinois　他
2	伝①	東洋②	VI_Architecture Egyptienne
3	伝②	『建築学』草稿①	
4	Gothique	『建築学』草稿②	
5	Renaissance ①		
6	Renaissance ②		
7	西洋建築②		
8	西洋建築③		
9	東洋建築①		
10	Les théâtres		
11	SYNTHESE		

表２　分析対象直筆ノート一覧

Arnaud

伝①

伝②

Gothique

Renaissance ①

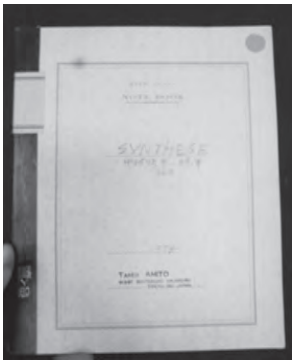
Renaissance ②

西洋建築②

西洋建築③

東洋建築①

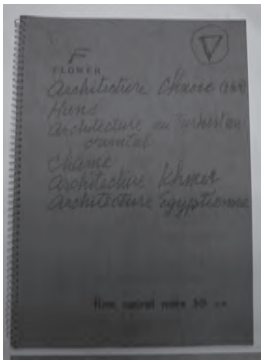
Les Théâtres



SYNTHESE

東洋

東洋②



V_Architecture chinois　他

VI_Architecture Egyptienne

4．直筆ノート概要

A．糸綴じノート系

①　「Arnaud」

このB5判ノート表紙には「Arnaud」という文字が薄く鉛筆書きされ、表紙下部には「學用ノート統制株式会社」の文字が確認できる。この会社は第二次世界大戦下の昭和19年に設立され、昭和21年9月30日に解散した組織である[註9)]。入手経路は不明だが、中村はこのノートを当該期間に入手した可能性がある。また、裏表紙には社印のほか、「No. 19」、「東京・日本ノート製」、「四十枚　定価三十八銭」の文字が確認できる。ノートには、制作年代を特定する具体的な数字の記載がなく、ノート使用期間は現在のところ不明である。

表紙の「Arnaud」は、中村がパリ留学時代、最も苦労した科目「コンストリュクション」を担当した建築家・技術者アルノーの苗字である。このノートにはアルノーの理論書の翻訳が記されていると推測できる。アルノー講義録の一部が中村の『建築学総説篇』だけでなく「『建築学』草稿」ノートにおいても訳出されていたように、アルノーの講義録は中村の理論基盤を支えた一つの理論である。また、その重要性は、中村の「バロック・ロココ」[註10)]（1962）参考文献リスト（写真1）からも明らかである。ここでのテーマとの直接的な関連性の希薄なアルノーやガデの理論書が参考文献に掲載されている。

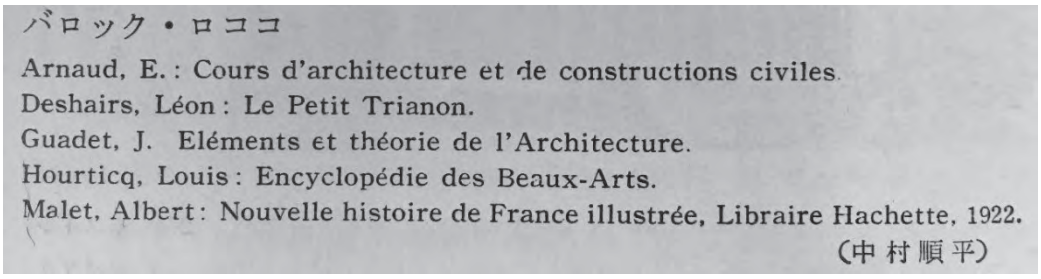

バロック・ロココ
Arnaud, E.: Cours d'architecture et de constructions civiles.
Deshairs, Léon: Le Petit Trianon.
Guadet, J. Eléments et théorie de l'Architecture.
Hourticq, Louis: Encyclopédie des Beaux-Arts.
Malet, Albert: Nouvelle histoire de France illustrée, Libraire Hachette, 1922.
（中村順平）

写真1　中村の参考文献
（『世界建築全集第8：西洋 第3（ルネサンス、バロック、ロココ、19世紀前半）』p.104）

ノートの内容とアルノーの講義録『建築・建設土木講義』（参考文献3）[註11)]の相関関係を調査したところ、ノートp.8までは『建築･建設土木講義』第1巻に該当箇所を発見した。残りの2ページは、別文献でガデの『建築の諸要素と理論』（参考文献6）第4巻に該当箇所を発見した。ガデの第4巻の一部は、日本建築士会主導のもと長野宇平治（1867-1937）によって『建築士及其職責』（1929）[註12)]として刊行されたが、中村の訳文は長野のそれとは異なるものであった[註13)]。なお、下表以降、直筆ノート内のフランス語アクセント記号の誤りについては適宜修正を加えた。

表3「Arnaud」ノート・表題リスト

直筆ノート記載項目	筆者訳・補足等	頁	頁	参考文献
Exécution、surveillance、conduit et réception des travaux	章：工事の施工、監督、管理、引渡	1	8	『建築・建設土木講義』
—Rôle de l'inspecteur	節：監督官の役割	3	5	『建築・建設土木講義』
—Rôle du vérificateur	節：検査官の役割	5	5	『建築・建設土木講義』
—Réception provisoire	節：仮受取	5	6	『建築・建設土木講義』
—Acceptation de travaux imparfaits	節：不完全な仕事の受諾	6	7	『建築・建設土木講義』
—Réception définitive	節：最終引渡	7	8	『建築・建設土木講義』
—Responsabilité de l'architecte	節：建築家の責任	8	8	『建築・建設土木講義』
Les Responsabilité	章：責任	9	10	『建築の諸要素と理論』

②　伝①および伝②

ノート表紙に「伝①」、「伝②」と書かれた2冊が存在する。①②と連続する数字の記載から、これらは一対のノートと想定できる。ノートはB5判で表紙下部には「YAMATO」と刻印されている。

ノート表紙や内部には制作年代の記載がなく、その制作目的等は不明である。

これら2冊には人物評伝が記載されている。「伝①」1枚目のCONTENTSページ両面には28名の人名が列挙されている（写真2・3）。また、「伝②」では、「伝①」とは異なりCONTENTSページの記載はなく、ノート本文側に23名の人名が列挙されている（写真4）。

列挙された人名と本文との対応関係を確認したところ、「伝①」では28名の内「Percier（ペルシエ）」、「Hippolyte Le Bas（イポリット・ル・バ）」、「Antoine-Laurent Thomas Vaudoyer（アントワーヌ＝ローラン＝トマ・ヴォードワイエ）」の3名を除く25名と追加13名の計38名の評伝と一部ルネッサンス期などの解説文が記載され、「伝②」ではノート本文側に列挙された23名の人物が取り上げられていた。

参考文献の探索は、本文の人名記載部分の末尾に記載された「BAによる」（写真5）という情報を手掛かりに行った。その結果、写真1の参考文献に含まれる美術史家ルイ・ウルティックLouis Hourticq（1875-1944）による『美術百科事典*Encyclopédie des Beaux-Arts*』[註14)]（1925（参考文献7））が該当することが判明した。ウルティックは、1919年より1929年までエコール・デ・ボザールの「芸術・美学史L'Histoire de l'art et d'esthétique」課目の教授を務めた人物である。

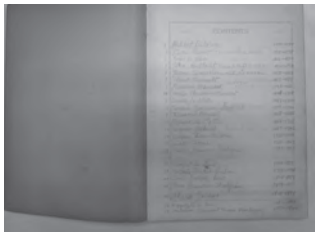


写真2「伝①」CONTENTS表

写真3「伝①」CONTENTS裏

写真4「伝②」

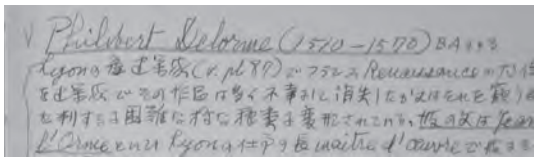


写真5　人名記載部分の一例（「伝①」より）

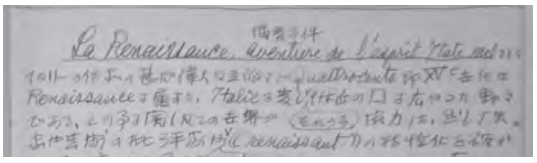


写真6　別文献参照例（「伝①」より）

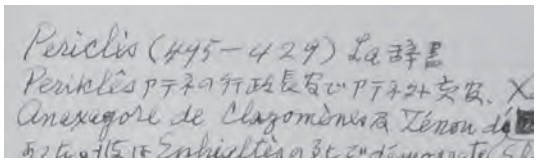


写真7　人名記載部分の一例（「伝②」より）

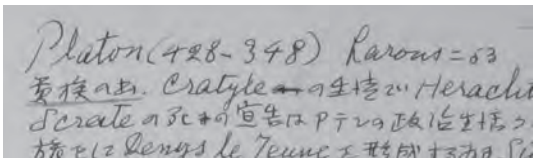


写真8　人名記載部分の一例（「伝②」より）

この辞書のサブタイトル「建築・彫刻・絵画・装飾芸術」（architecture, sculpture, peinture, arts décoratifs）の記載から、この事典は建築のみならず彫刻、絵画、装飾芸術を取り扱ったものであることがわかる。この書物は2巻組の書物で、上巻は「A-K」、下巻は「L-Z」と分類され、アルファベット順に語句が並んでいる。写真6のような「L'Ital mel」に類似する表記をいくつか確認した。調査の結果、ベルナール・ジャクリーヌBernard Jacquelineの『イタリアとその傑作*L'Italie et ses merveilles*』（1961）[註15)]が該当した。この書物の使用から、このノートが1961年以降に作成されたことがわかる。

「伝②」の一部には「La 辞書」（写真 7）、「Larous による」（写真 8）などの記載が確認できる。この記載はラルース Larousse 社のフランス語辞典を指していると思われるが、使用した具体的な版は現在のところ不明である。

表 4 及び表 5 は 2 冊のノートで取り上げられた人物名とその生没年、参考文献を整理したものである。なお、筆者訳・補足等欄の「R」はルネッサンス期を、「B」はバロック期を、「古典」は古典主義時代、「新古典」は新古典主義時代を、それぞれ示している。

表 4「伝①」ノート人名等リスト

直筆ノート記載項目	筆者訳・補足等	頁	頁	参考文献
Philibert Delorme（1510-1570）	フィリベール・ドゥロルム（仏建築家・R）（右頁に補足あり）	1	2	『美術百科事典』
Pierre Lescot（1515-1578）	ピエール・レスコ（仏建築家・R）	3	3	『美術百科事典』
Louis Le Vau（1612-1670）	ルイ・ル・ヴォー（仏建築家・B）	4	4	『美術百科事典』
Jean Bullet（Jean-Baptiste Bullet）（1510-1578）	ジャン・ビュレ（仏神学者）	5	5	『美術百科事典』
Jacques Lemercier（1585-1654）	ジャック・ルメルシエ（仏建築家・B）（右頁に補足あり）	6	6	『美術百科事典』
Claude Perrault（1613-1688）	クロード・ペロー（仏建築家・B）（途中右頁に補足あり）	7	9	『美術百科事典』
François Mansart（1598-1666）	フランソワ・マンサール（仏建築家・B）	10	10	『美術百科事典』
Jules Hardouin-Mansart（1646-1708）	ジュール・アルドゥアン＝マンサール（仏建築家・B）（右頁に補足あり）	11	12	『美術百科事典』
André Le Nôtre（1613-1700）	アンドレ・ル・ノートル（仏造園家）	13	14	『美術百科事典』
Jacques-Germain Soufflot（1709-1780）	ジャック＝ジェルマン・スフロ（仏建築家・新古典）（途中右頁に補足あり）	15	16	『美術百科事典』
François Blondel（1618-1686）	フランソワ・ブロンデル（仏建築家・仏古典）	17	18	『美術百科事典』
Robert de Cotte（1656-1735）	ロベール・ドゥ・コット（仏建築家）	19	20	『美術百科事典』
Jacques Gabriel（1667-1742）	ジャック・ガブリエル（仏建築家・仏古典）（右頁に補足あり）	21	21	『美術百科事典』
Jacques-Denis Antoine（1733-1801）	ジャック・ドゥニ・アントワーヌ（仏建築家・新古典）（右頁に補足あり）	22	22	『美術百科事典』
Victor Louis（1735-1807）	ヴィクトール・ルイ（仏建築家）	23	23	『美術百科事典』
Pierre-François-Léonard Fontaine（1762-1843）	ピエール＝フランソワ＝レオナール・フォンテーヌ（仏建築家・新古典）（右頁に Joseph Peyre(1730-1785) の略歴）	24	28	『美術百科事典』
Eugène Emmanuel Viollet-le-Duc（1814-1879）	ヴィオレ・ル・デュク（仏建築家）（右頁に Achille-François-Rude Leclère（1782-1853）の略歴）	29	31	『美術百科事典』
Jacques Félix Duban（1797-1870）	ジャック・フェリックス・デュバン（仏建築家）（右頁に補足あり）	32	32	『美術百科事典』
Joseph-Louis Duc（1802-1879）	ジョセフ＝ルイ・デュク（仏建築家）	33	33	『美術百科事典』
Jean-François Chalgrin（1739-1811）（Jean-François-Thérèse Chalgrin）	ジャン＝フランソワ＝テレーズ・シャルグラン（仏建築家）	34	34	『美術百科事典』
Charles Garnier（1825-1898）	シャルル・ガルニエ（仏建築家）（右頁にオペラ・ガルニエの補足あり）	35	35	『美術百科事典』
Charles-Louis Girault（1851-1932）	シャルル＝ルイ・ジロー（仏建築家）	36	36	『美術百科事典』
Victor Baltard（1805-1874）	ヴィクトール・バルタール（仏建築家）（右頁に Guillaume Guillon Lethière（1760-1832）の名前のみ）	37	38	『美術百科事典』
Théodore Ballu（1817-1885）	テオドール・バリュ（仏建築家）	39	39	『美術百科事典』
Stanislas-Louis Bernier（1845-1915）	スタニスラス＝ルイ・ベルニエ（仏建築家）	40	40	『美術百科事典』
Andrea del Castagno（1380?-1457）	アンドレア・デル・アスターニョ（伊画家・15C）（右頁に補足あり）	41	41	『美術百科事典』
Brunelleschi ou Brunellesco（1377-1446）（Filippo di ser Brunellesco）	ブルネレスキまたはブルネレスコ（伊建築家・R）（右頁に補足あり）	42	46	『美術百科事典』

表４（続き）「伝①」ノート人名等リスト

直筆ノート記載項目	筆者訳・補足等	頁	頁	参考文献
Cronaca Simone del Pollaiolo（1454-1508）	クロナカ・シモーネ・デル・パライオロ（伊建築家・R）	47	47	『美術百科事典』
Benedetto da Maiano（1442-1497）	ベネデット・ダ・マイアーノ（伊建築家・R）（右頁に補足あり）	48	50	『美術百科事典』
Giorgio Vasari（1511-1574）	ジョルジョ・ヴァザーリ（伊建築家・マニエリスム）	51	52	『美術百科事典』
La renaissance、aventure de l'esprit	ルネッサンス、精神の冒険	53	右	Italie mel
Leon Battista Alberti（1404-1472）	レオン・バティスタ・アルベルティ（伊建築家・R）（右頁に補足あり）	54	56	『美術百科事典』
ギリシア美の合理性	−	57	右	『美術百科事典』
Renaissance et Contre-Réforme	ルネッサンスと対抗宗教改革	58	60	Italie mel
Raffaello Santi	ラファエロ・サンティ（伊建築家・R）（右頁に補足あり）	61	61	『美術百科事典』
Le Caravage、peintre indépendant	（右頁に Concours Sterile あり）	62	62	Italie mel
Baldassarre Peruzzi	バルダッサーレ・ペルッツィ（伊建築家・R）	63	64	『美術百科事典』
Giuliano da Sangallo	ジュリアーノ・ダ・サンガッロ（伊建築家・R）	65	65	『美術百科事典』
Cosimo de Médicis、芸術の保護者	コジモ・デ・メディチ、芸術の保護者	66	右	Italie mel
L'« idéalisme » de la sculpture grecque	ギリシャ彫刻の理想主義	67	右	『美術百科事典』
Germain Pilon（1535-1590）	ジェルマン・ピロン（伊彫刻家・R）	68	69	『美術百科事典』
Jean Goujon（1510 ～ 1514-1564 ～ 1568）	ジャン・グジョン（伊彫刻家・R）	70	71	『美術百科事典』
Augustin Pajou（1730-1809）	オーギュスタン・パジュー（伊彫刻家・R）	72	72	『美術百科事典』
Francesco Primatice（1504-1570）	フランチェスコ・プリマティス（伊画家・R）	73	73	『美術百科事典』

表５　伝②：人名等リスト

筆者訳・補足等	直筆ノート記載項目	頁	頁	参考文献
David（1748-1825）	ダヴィッド（仏画家）	3	6	『美術百科事典』
Nicolas Poussin（1594-1665）	ニコラ・プッサン（仏画家）（p.9 右頁に Rene Menard の略歴）	7	10	『美術百科事典』
Pierre Puget（1622-1694）	ピエール・プジェ（仏画家建　バロ）	11	11	『美術百科事典』
Antoine Gros（1771-1835）	アントワーヌ・グロ（仏画家）	12	14	『美術百科事典』
Ferdinand Delacroix（1798-1863）	フェルディナン・ドラクロワ（仏画家）	15	16	『美術百科事典』
Géricaul Théodore（1791-1824）	ジェリコー・テオドール（仏画家）	17	17	『美術百科事典』
Edmé Bouchardon（1698-1762）	エドメ・ブーシャルドン（仏彫刻家）	18	18	『美術百科事典』
Ingres（Jean-Auguste-Dominique）（1780-1867）	アングル（ジャン＝オーギュスト・ドミニク）（仏画家）（21 頁白紙）	19	20	『美術百科事典』
Révolution du Bernin（1598-1680）	ベルニーニ革命	22	24	『美術百科事典』
Hippolyte Le Bas（1782-1867）	イポリット・ル・バ（仏建築家）	25	25	『美術百科事典』
Georges-Eugène Haussmann（1809-1891）	ジョルジュ＝ウジェーヌ・オスマン（仏政治家）（右頁に補足あり）	26	26	辞書
Périclès（495-429）	ペリクレス（古代ギリシャ政治家）（右頁に補足あり）	27	27	La 辞書
Phidias（490-431）	フィディアス（古代ギリシャ彫刻家）	28	28	La 辞書
Antoine-Laurent-Thomas Vaudoyer（1756-1846）	アントワーヌ＝ローラン＝トマ・ヴォードワイエ（仏建築家）（30 頁人名記載途中で削除）	29	29	『美術百科事典』
Donato Bramante（1444-1514）	ドナト・ブラマンテ（伊建築家）	31	34	『美術百科事典』
Annibale Lippi（年代未記載）	アンニバーレ・リッピ（伊建築家）	35	35	『美術百科事典』
Michel-Ange Buonarotti（1475-1564）	ミケランジェロ・ブオナロッティ（伊芸術家）（右頁に補足あり）	36	37	『美術百科事典』
Léonard de Vinci（1452-1519）	レオナルド・ダ・ヴィンチ（伊芸術家）（39 頁白紙）	38	38	『美術百科事典』
François Rude（1784-1855）	フランソワ・リュード（仏彫刻家）	39	42	『美術百科事典』
David d'Angers (Pierre-Jean David)	ダヴィッド・ダンジェ（仏彫刻家）（右頁に Canova(Antoine) の略歴）	43	44	『美術百科事典』
Platon（428-348）	プラトン（古代ギリシャ哲学者）	45	45	Larous ニよる
Aristote（384-322）	アリストテレス（古代ギリシャ哲学者）	46	46	Larous
Vitruve（1ers.avJC）	ウィトルウィウス（古代ローマ建築家）	47	47	−

この人名リストから中村は西洋建築における古典主義時代、フランス・ルネッサンス期からバロック・ロココ期および新古典主義が隆盛を極めた前近代までの人物を中心に取り上げていたことがわかる。「伝①」では、フランスで活躍した芸術家や建築家が主に取り上げられ、同時代のイタリアを代表する建築家らの評伝も取り上げられている。一方「伝②」は、フランスのみならずイタリアの芸術家が中心で古代の哲学者も取り上げられている。

これらの人名の多くがバロック・ロココ期を代表する建築家や芸術家であることから、前出の中村が執筆した『世界建築全集第8：西洋 第3（ルネサンス、バロック、ロココ、19世紀前半)』のバロック・ロココの文章や、同時代の中村がインテリアセンタースクール（現、ICSカレッジオブアーツ）で講演した「巴里散歩」(1967）や雑誌『新建築』連載の「パリ美術院Ⅰ～Ⅶ」[註16)]（1968）との関連が指摘できる。特に建築家のみならず彫刻家を取り上げている点は、たとえば、大阪歴史博物館蔵の吉原正（1942年卒）による「巴里散歩」の講演メモと比較することで両者の関連性が考えられる。

③　Gothique

このノートの表紙にはペン字で「Gothique」と記載されている。鉛筆書きの消し跡も確認でき、当初「Histoire générale de Gothique」とする予定だったのだろう。表紙の記載の通りゴシック建築に関する記述がまとめられている。このノートは「Arnaud」ノート同様、學用ノート統制株式会社製ノートが使用されている。具体的な制作年代の記述はないが、「Arnaud」ノートと同時期に作成された可能性がある。

ノートは右側ページ一面のみの使用を基本とし、本文はペン書きされている。左ページの使用はほとんどなく、関連項目のメモが部分的に記載されているにとどまっている。本文中にはところどころフランス語単語が発見できる。このことからフランス語文献の翻訳である可能性が高い。小見出し横に参考文献の該当ページの記載があることや本文の始まる2枚目上部のメモなどから、このノート作成に使用した参考文献を調査した。

その結果、「伝①」「伝②」で参照された前出のウルティックの『美術百科事典』を検討したところ、一致する部分を下巻で確認した。下表では、ノートに記載された小見出しを列挙した。

このノートでは、『美術百科事典』下巻p.25から始まる「第4部キリスト教芸術第4章ゴシック自然主義 Quatrième Partie, L'art Chrétien, Chapitre IV, Le Naturalisme Gothique」の参考文献を除くp.56までの本文と同巻p.59から始まる「第5部ルネッサンス　第1章イタリア Cinquième Partie, La Renaissance, Chapitre I, L'Italie」のフレンツェに関するp.63の一部までの翻訳がなされていた。このノートでは、タイトルにあるゴシック建築だけでなくフィレンツェのルネッサンス建築に関する記述も一部含まれていた。

表 6「Gothique」ノート・表題リスト

直筆ノート記載項目	筆者訳・補足等	頁	頁	参考文献
Le naturalisme gothique	ゴシック自然主義	1	3	『美術百科事典』
Le château fort	堅牢城	3	5	『美術百科事典』
Architecture municipale	公共建築	5	6	『美術百科事典』
Hotels、Palais、remparts	邸宅、宮殿、城壁	6	8	『美術百科事典』
Le naturalisme dans l'art	藝術における自然主義	8	9	『美術百科事典』
Sculpture naturaliste：La Vierge et les Saints	自然は彫刻：聖母と聖人	9	10	『美術百科事典』
La sculpture funéraire	葬儀の彫刻	10	11	『美術百科事典』
L'évolution de la sculpture funéraire	葬儀の彫刻の進化	11	12	『美術百科事典』
Le style Bourguignon	ブルゴーニュ様式	13	14	『美術百科事典』
Apparition de la peinture naturaliste	ナチュラリスト絵画の登場	14	15	『美術百科事典』
Le naturalisme dans la miniature	ミニュチュアのナチュラリズム	15	17	『美術百科事典』
Le paysage dans les livres d'heures	時の本の風景	17	18	『美術百科事典』
La technique de la peinture a la détrempe	テンペラ画の技法	18	20	『美術百科事典』
L'innovation des frères Hubert et Jean Van Eyck	フーベルトとヤン・ヴァン・アイク兄弟のイノベーション	20	21	『美術百科事典』
La peinture et l'analyse de la nature	絵画と自然分析	21	22	『美術百科事典』
La peinture et le rendu de l'atmosphère	絵画と雰囲気のレンダリング	22	24	『美術百科事典』
La gamme des valeurs et la gamme des tonalites	値の範囲と音色の範囲	24	25	『美術百科事典』
Le portrait de la civilisation flamande	フランドル文明の肖像	25	27	『美術百科事典』
La propagation de la technique flamande	フランドル技法の普及	27	27	『美術百科事典』
L'école de Bruges au XVe siècle	15 世紀のブルージュ学派	27	29	『美術百科事典』
L'évolution du style flamande	フランドル様式の変化	29	30	『美術百科事典』
L'influence flamande sure l'Europe	ヨーロッパにおけるフランドルの影響	30	30	『美術百科事典』
France	フランス	30	31	『美術百科事典』
Allemagne	ドイツ	31	32	『美術百科事典』
La fis de l'art chrétien médiéval	中世キリスト教美術の誕生	32	33	『美術百科事典』
La renaissance の L'Italie	ルネッサンスのイタリア	33	35	『美術百科事典』
L'union de la science et de l'art	科学と芸術の融合	35	37	『美術百科事典』
L'indépendance de l'activité artistique	芸術活動の独立性	37	38	『美術百科事典』

④　Renaissance ①および Renaissance ②

これら 2 冊のノート表紙には、それぞれ「Renaissance ①」「Renaissance ②」と記載され、前記「伝①」「伝②」ノート同様、連続するノートと判断できる。「Renaissance ①」は「Gothique」ノート同様、制作年代の特定に至る情報はないが、學用ノート統制株式会社製ノートが使用され、「Arnaud」や「Gothique」ノートと同時期に作成された可能性がある。一方、「Renaissance ②」は製造元の特定には至っていないが學用ノート統制株式会社製ノートとは異なるものが使用されている。

制作年代に関する具体的な記述は発見できないが、「Renaissance ②」の冒頭にある「第 20 号②内部」という記載は、鉛筆で上から「第 21 号」へ修正されているが、制作年代の一つの可能性を提示している（写真 9）。

この記述は、中村の横浜高等工業学校の教え子、北村泰彦（1942 年卒）らが中心となって発行した小冊子の草稿とみられる。この小冊子の記録は、網戸がまとめた『建築名作集』（写真 10）、桧の会が保持する写真資料および教え子柳田操（1942 年卒）が平成 10 年 7 月 20 日付で桧の会に提供した資料のデジタル・データの 3 種が確認できる。

中村の直筆原稿をまとめた『建築名作集』を確認したところ、小冊子の発行期間は 1951 年ごろから 1953 年 4 月までであり、発行者は中村塾出版会で、毎月主にフランスのルーブル宮殿やヴェルサイユ宮殿、フォンテーヌブロー城などの写真 4 枚一組と中村による解説文で構成されている。

原稿の一部に記載された日付と中村塾出版会の発行但し書きの記載を総合的に判断すれば、この小冊子は月刊誌のような体裁で第22号まで発行された。相互で内容は異なるが、第20号が1953年2月発行であることから（写真11）、この小冊子発行時期に「Renaissance ②」のノートが作成された可能性が指摘できる。

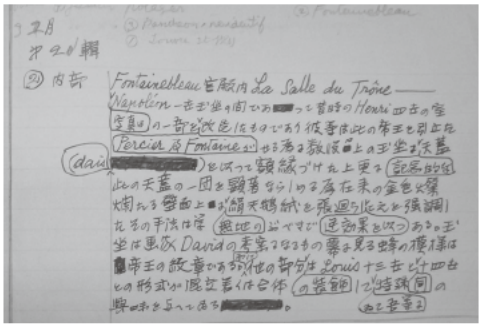


写真9「Renaissance ②」冒頭

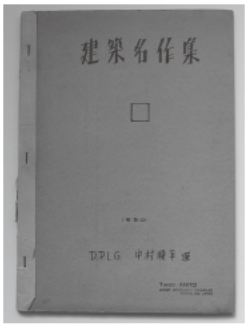


写真10『建築名作集』
（桧の会蔵）

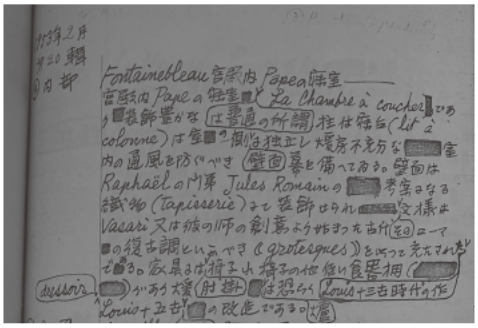


写真11『建築名作集』第20号
（桧の会蔵）

「Renaissance ①」および「Renaissance ②」のノートには、表題の通りルネッサンス建築に関する記述がまとめられている。ノートの記載方法は「Gothique」ノートと同様である。見出し部分には「Gothique」ノートのような参考文献を想起させる記載はないが、小見出し部分の一部にページ数の記載が確認できた。それらのページ数から「Gothique」ノートで参照したウルティックの『美術百科事典』を調査したところ、該当箇所が発見できた。これらルネッサンス建築に関する2冊のノートも同様の参考文献であった。「Gothique」ノート同様、ところどころに記載のある小見出しを下表に列挙した。このノートでは「Gothique」ノートの続きとなる『美術百科事典』下巻「第5部ルネッサンス　第1章イタリア Cinquième Partie, La Renaissance, Chapitre I, L'Italie」の p.63 から p.114 までのフィレンツェとローマに関する部分が取り上げられた。

表7「Renaissance ①」ノート・表題リスト

直筆ノート記載項目	筆者訳・補足等	頁	頁	参考文献
（続き）	芸術活動の独立性（続き）	1	3	p.37
L'importance de la personnalité de l'artiste	アーティストの個性の重要性	4	4	『美術百科事典』
Apparition du style « Renaissance »	「ルネッサンス」様式の外観	5	5	『美術百科事典』
Intervention des ordres antiques	古代秩序の介入	6	6	『美術百科事典』
Le naturalisme gothique et la naturalisme Florentin	ゴシック自然主義とフィレンツェ然主義	8	8	『美術百科事典』
Les tableaux de bronze de Ghiberti	ジベルティのブロンズ画	9	9	『美術百科事典』
Donatello accentue les naturalisme gothique	ゴシック自然主義を強調するドナテッロ	11	11	『美術百科事典』
Donatello découvre la beauté antique	古代美を発見するドナテッロ	12	12	『美術百科事典』
Le pathétique de Donatello	ドナテッロの情けなさ	13	13	『美術百科事典』
Les marbrées et bronziers florentins	フィレンツェの大理石とブロンズの木	14	14	『美術百科事典』
La peinture suit la sculpture dans ses recherches nationalistes	絵画は民族主義的研究の彫刻を追う。	16	16	『美術百科事典』
L'abandon des conventions grotesque	グロテスクな慣習の放棄	17	17	『美術百科事典』
Le naturalisme florentin est scientifique	フィレンツェ自然主義は科学的	18	18	『美術百科事典』
Les fresques de Masolino et de Masaccio	マゾリーノとマサッチョのフレスコ画	19	19	『美術百科事典』
Les constructeurs de formes dans l'espace	空間の中のフォームビルダー	21	21	『美術百科事典』
L'inspiration mystique et la couleur pure：Fra Angelico	神秘的なインスピレーションとピュアな色：フラ・アンジェリコ	21	21	『美術百科事典』

表 7（続き）「Renaissance ①」ノート・表題リスト

直筆ノート記載項目	筆者訳・補足等	頁	頁	参考文献
Le naturalisme assombrit la palette	自然主義はパレットを暗くする	23	23	『美術百科事典』
Le style « préraphaélite »	ラファエル前派	24	26	『美術百科事典』
Le style maigre incompatible avec le modelé antique	アンティークモデルと矛盾するメーグル様式	26	26	『美術百科事典』
La peinture florentine et l'image de la société	フィレンツェ絵画と社会イメージ	27	28	『美術百科事典』
La révolution de Leonard de Vinci	レオナルド・ダ・ヴィンチの革命	28	29	『美術百科事典』
La conception reste sculpturale	デザインは彫刻的なまま	29	30	『美術百科事典』
Le dessin par ombre saisit pleinement la module	影絵はモジュールを完全に捕らえる	30	30	『美術百科事典』
Transparence et largeur de l'ombre	透明度と影の幅	30	31	『美術百科事典』
Découverte de l'atmosphère	大気の発見	31	32	『美術百科事典』
Vinci unit la science de l'art	ヴィンチは芸術の科学を統合	32	36	『美術百科事典』
Passage du style « primitif » au style « moderne »	「プリミティブ」から「モダン」スタイルへの移行	36	36	『美術百科事典』
Les dernières maitres florentins	最後のフィレンツェの名人	36	38	『美術百科事典』
La renaissance d'installe à Rome	ローマでの入植地の再生	38	39	『美術百科事典』
Les commandes pontificales	教皇令	39	40	『美術百科事典』
Les maitres des écoles d'Ombrie	ウンブリア学派の巨匠たち	40	40	『美術百科事典』

表 8「Renaissance ②」ノート・表題リスト

直筆ノート記載項目	筆者訳・補足等	頁	頁	参考文献
第 20 号②内部		1	1	『美術百科事典』
メモ		2	2	『美術百科事典』
（ノート①からの続き）	ウンブリア学派の巨匠たち	3	3	『美術百科事典』
La formation et la jeunesse de Michel-Ange	ミケランジェロの修行と青春	3	5	『美術百科事典』
Du tombeau de Jules II au plafond de la Sixtine	ユリウス 2 世の墓からシスティーナの天井まで	5	7	『美術百科事典』
L'athlétisme lyrique	リリック・アステティズム	7	8	『美術百科事典』
Les scènes de la genèse	創世記のシーン	8	9	『美術百科事典』
Le dessin du mouvement	動きの図面	9	10	『美術百科事典』
La gymnastique des Ignudi	イニューディの体操	10	12	『美術百科事典』
Les prophètes et les sibylles	預言者とシュビラ	12	14	『美術百科事典』
L'arrivée de Raphaël à Rome	ラファエロのローマ到着	14	15	『美術百科事典』
La chambre de la Signature	署名の間	15	16	『美術百科事典』
La composition dans l'espace	空間の構成	16	17	『美術百科事典』
Le dessin de la profondeur	深さの描画	17	18	『美術百科事典』
Rythme et mouvement	リズムと動き	18	19	『美術百科事典』
Union de la perspective et de la pense	遠近法と思想の融合	19	20	『美術百科事典』
La chambre d'Héliodore	ヘリオドロスの部屋	20	21	『美術百科事典』
L'inspiration antique chez Raphaël	ラファエロの古代霊感	21	23	『美術百科事典』
Raphaël renouvelle l'iconographie	イコノグラフィーを一新するラファエロ	23	24	『美術百科事典』
Michel-Ange exécute à Florence les tombeaux des Médicis	ミケランジェロがフィレンツェでメディチの墓を飾る	24	25	『美術百科事典』
Le jugement dernier de Michel-Ange	ミケランジェロの最後の審判	26	27	『美術百科事典』
Michel-Ange architecte	建築家ミケランジェロ	27	29	『美術百科事典』

⑤　西洋建築②および西洋建築③

西洋建築と題されたノートは 2 冊存在する。「伝①」「伝②」や「Renaissance ①」「Renaissance ②」同様、「西洋建築②」「西洋建築③」との記載から連続するノートと判断できる。大阪歴史博物館にはこれら 2 冊が所蔵されているが、番号の並びから「西洋建築①」や「西洋建築④」以降の存在が考えられる。そこで寄贈者及びその関係者への調査を試みた。その結果、詳細は別項に譲るが、桧の会が保管する「西洋建築①」（写真 12）および「西洋建築④」（写真 13）の存在が判明した。

ノートは學用ノート統制株式会社製が使用されており、使用・制作年代は不明であるが、他の同種のノートと同時代に使用・制作された可能性が指摘できる。「西洋建築②」「西洋建築③」のノー

トには制作年代に関する具体的な記述はみられない。しかし、「西洋建築④」（桧の会蔵）に制作年代を示唆するメモを発見した。

このメモは、中村による広島平和記念カトリック設計競技のスケッチである（写真 14）。広島平和記念カトリック設計競技は、1948 年 3 月 28 日に要項が発表され、同年 6 月 10 日を提出期限とした設計競技であった。同年 4 月 6 日付の朝日新聞にコンペ情報が掲載されるなど当時広く話題となった。このスケッチが「西洋建築④」ノートに挟まれていたことを考慮すると、1948 年ごろに「西洋建築」と題された 4 冊のノートが作成された可能性が指摘できる。

写真 12「西洋建築①」
（桧の会蔵）

写真 13「西洋建築④」
（桧の会蔵）

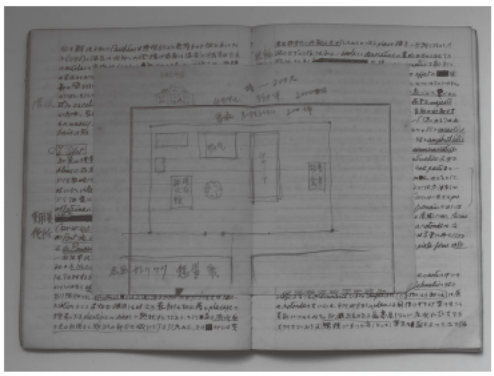


写真 14　広島カトリック懸賞案スケッチ
（桧の会蔵）

ノートの使用法は、これまでのノートと異なりノート両面が使用されている。ペン書きのスタイルに変化はないが、これまでのノートとは異なり小見出しの記載はない。他のノートのようなページ数の具体的な記載も確認できず、参考文献を示唆する手掛かりとなる記載はない。

いくつかの文献との関係を調査する中、他のノートとの関係等を考慮し、後述する合紙綴じ製本ノートの「東洋②」の冒頭の章題下にある「(Benoit による)」書物の可能性を検討した。

その結果、フランス・リール大学芸術史教授を務めたフランソワ・ブノワ François Benoit（1870-1947）の『建築―古代 *L'architecture – Antiquité*』（1911（参考文献 4））に該当箇所を発見した。

この書物はフランス国立図書館館長を務めたアンリ・マルセル Henry Marcel（1854-1926）監修の「芸術史教科書 Manuels d'Histoire de l'Art」シリーズの 1 冊で、1911 年版、1912 年版、1933 年版、1934 年版の計 4 版が確認できるが、「西洋建築②」および「西洋建築③」の使用版の特定には至っていない。なお、「西洋建築②」の冒頭は、「西洋建築①」の「メソポタミア建築」部分からの続きとして記述されている。

また、ブノワは『建築―古代』のほか『建築―中世・近代東洋 *L'architecture – L'Orient Médiéval et Moderne*』（1912（参考文献 5））、『建築―ローマ時代からロマネスク時代までの中世西洋 *L'architecture – L'Occident médiéval du Romain au Roman*』（1933）[註 17]、『建築―初期ゴシック時代からゴシック時代までの中世西洋 *L'architecture – L'Occident médiéval romano-gothique et gothique*』（1934）[註 18] の 3 冊も担当している。

表 9「西洋建築②」ノート・表題リスト

直筆ノート記載項目	筆者訳・補足等	頁	頁	参考文献
(続き)	メソポタミア建築（続き）	1	1	『建築―古代』
―孤立の soutien	―孤立の支持	2	2	『建築―古代』
―床及 couverture	―床及び屋根材	2	2	『建築―古代』
―効果	–	4	4	『建築―古代』
―調和及 ordre の効果	―調和及オーダーの効果	5	5	『建築―古代』
―Ordre Plastique	―塑造オーダー	6	6	『建築―古代』
Asie Antérieure	西アジア	9	15	『建築―古代』
Architecture Syrienne	シリア建築	16	25	『建築―古代』
Première et deuxième époque Architecture Égéennes	第 1 期・第 2 期エーゲ海建築	26	27	『建築―古代』
Architecture Crétoise 及 Macérienne Architecture Crétoise	クレタ及ミケーネ建築 ミケーネ建築	28	37	『建築―古代』
Architecture Mycénienne	ミケーネ建築	38	48	『建築―古代』
Architecture Egéennes préhelléniques	プレギリシャ・エーゲ海建築	49	56	『建築―古代』
Architecture Etrusque	エトルリア建築	57	69	『建築―古代』
Architecture Égéenne Hellénique	ギリシャ・エーゲ海建築	70	82	『建築―古代』

表 10「西洋建築③」ノート・表題リスト

直筆ノート記載項目	筆者訳・補足等	頁	頁	参考文献
(続き II)	ギリシャ・エーゲ海建築（続き）	1	53	『建築―古代』
Architecture Eclectique Perse 及 Romaine	折衷建築 ペルシア及びローマ	54	73	『建築―古代』
Architecture Romaine	ローマ建築	74	80	『建築―古代』

⑥　東洋建築①

このノートの表紙には「東洋建築①」と記載されている。「東洋建築①」との表記から、他のノート同様、連続するノートの可能性が指摘できる。大阪歴史博物館には「東洋建築①」のみが所蔵されているが、西洋建築ノートと同様にその他の存在を確認したところ、詳細は別項に譲るが、「東洋建築②」（桧の会蔵）の存在を確認した。ノートは學用ノート統制株式会社製が使用されており、使用・制作年代は不明であるが、他の同種のノートと同時代に使用・制作された可能性が指摘できる。

一方、他のノート同様、このノートにも具体的な制作年代の記述はない。西洋建築ノート同様にブノワの書物の可能性を検証したところ、西洋建築で使用されたものとは異なるブノワ『建築―中世・近代東洋』（1912（参考文献 5））に該当箇所を発見した。

表 11「東洋建築①」ノート・表題リスト

直筆ノート記載項目	筆者訳・補足等	頁	頁	参考文献
Architecture Mésopotamie-Perse	メソポタミア＝ペルシア建築	1	11	『建築―中世・近代東洋』
Architecture (Secondaire) Arabe avant l'Islam	イスラム教以前のアラブ建築（第二次）	12	16	『建築―中世・近代東洋』
Architecture de Egypte Copte	エジプト・コプト建築	17	21	『建築―中世・近代東洋』
Architecture Chrétienne d' Afrique	アフリカのキリスト教建築	22	25	『建築―中世・近代東洋』
Architecture Chrétiennes de Orient Médiéval	中世東方のキリスト教建築	26	33	『建築―中世・近代東洋』
Architecture Chrétienne dans le Haute-Mésopotamie et en Syrie	上メソポタミア・シリアのキリスト教建築	34	48	『建築―中世・近代東洋』
Architecture Chrétienne Extra-Egéenne	エクストラ・エーゲ海のキリスト教建築	49	53	『建築―中世・近代東洋』
Architecture Arménienne	アルメニア建築	54	59	『建築―中世・近代東洋』
Architecture Byzantine	ビザンチン建築	60	89	『建築―中世・近代東洋』
Architecture éclectique des civilisation musulmanes	イスラム文明の折衷建築	90	120	『建築―中世・近代東洋』

⑦　Les Théâtres

ノート表紙の「Les Théâtres」の表記から、劇場に関するノートであることが想定される。具体的なノートの制作年代や参考文献の記載はないが、古今東西の劇場に関する記載がみられる。ノートの使用法は右ページ片面のみを使用するスタイルで、部分的に左ページに補足の記載が見られる。ノートに記載された項目および裏表紙見返し部分に張られた劇場リストに掲載された内容を下表に列挙した。なお、本文の西洋の劇場部分の参考文献は、シャルル・ガルニエ Charles Garnier（1825-1898）『劇場 *Le théâtre*』[註19)]（1871）やジュリアン・ガデ『建築の諸要素と理論』（参考文献6）、ルシアン・ドュベック Lucien Dubech（1881-1940）『図解演劇一般史 *Histoire Générale Illustrée du Théâtre*』[註20)]（1931）、ゲオルギー・クレスケンティビッチ・ルーコムスキー Gueorgui Kreskentievitch Loukomski（1884-1952）『古代と近代の劇場 *Les Théâtres anciens et modernes*』[註21)]（1934）、雑誌『ラーシテクチュール・ドージュードュイ *L'Architecture d'aujourd'hui*』1938年 No.9「スペクタクル Le Spectacle」[註22)] など[註23)] を調査したが、具体的な一致箇所の特定には至らなかった。

表 12「Les Théâtres」ノート・表題リスト

直筆ノート記載項目	筆者訳・補足等	頁	頁	参考文献
Le Théâtre				
野外時代	－	1	1	不明
室内時代	－	1	1	不明
ギリシアの劇場	－	1	3	不明
劇場の典型	－	4	6	不明
役者と観劇者	－	6	8	不明
ローマの劇場	－	9	11	不明
寺院の入口前のもの	－	12	14	不明
Deuxième Période les théâtres en salle fermées	第２期　屋内の劇場	15	15	不明
起源	－	15	16	不明
英国	－	16	16	不明
イタリー	－	17	17	不明
フランス	－	17	19	不明
salle と scène	ホールと舞台	19	21	不明
所理の仕方	－	21	23	不明
器械と実現主義	－	23	24	不明
劇場の勝利	－	24	26	不明
探光時代	－	26	27	不明
電気治具	－	27	28	不明
近代の舞台	－	28	29	不明
coupoles	丸天井	29	30	不明
能楽の発達	－	裏		不明
田楽と猿楽	－	31	34	不明
文楽人形劇	－	35	36	不明
歌舞伎	－	37	38	不明
Le Théâtre リスト（写真 15）	裏表紙見返し部貼り付けリスト			
①　Théâtre de Dionisos à Athens	アテネ・ディオニソス劇場			不明
②　Décors au moyen âge	中世の装飾			不明
③　Parade de théâtre improvise	即興劇場のパレード			不明
④　Théâtre du Glove	グローブ劇場			不明
⑤　Les spectateurs de la siècle XVII	17 世紀の演劇			不明
⑥　Louis XIV aux fetes de 1674	1674 年祭のルイ 14 世			不明
⑦　Vues de la coupole Forthuny	フォートニーのクーポラからの眺め			不明
⑧　Opera 以前の plan IV の p346	第 4 巻・Fig.1755（写真 16）			『建築の諸要素と理論』

表 12（続き）「Les Théâtres」ノート・表題リスト

直筆ノート記載項目	筆者訳・補足等	頁	頁	参考文献
⑨ Théâtre de Mayence IIIp.84	マインツ劇場（第 3 巻・Fig. 908）（写真 17）			『建築の諸要素と理論』
⑩ Scala de Milano 断面 IIIp.98	ミラノ・スカラ座（第 3 巻・Fig. 914）（写真 18）			『建築の諸要素と理論』
⑪ Opera de Paris 断面 IIIp.99	パリ・オペラ座（第 3 巻・Fig.915）（写真 19）			『建築の諸要素と理論』
⑫ 同天井 plan IIIp.105	第 3 巻・Fig.919（写真 20）			『建築の諸要素と理論』
⑬ 同馬車廻し IIIp.137	第 3 巻・Fig.929（写真 21）			『建築の諸要素と理論』
⑭ 同 plan	平面			不明
⑮ 同階段室	–			不明
⑯ 同 foyer	ホワイエ			不明
⑰ 同 foyer	ホワイエ			不明
⑱ 同階段室の配景図	–			不明
⑲ 同 façade	ファサード			不明
⑳ 同 Ch. Garnier 記念碑	シャルル・ガルニエ記念碑			不明

裏表紙見返し部分に張られた劇場リストの 8 項目から 13 項目までの末尾にあるローマ数字と頁の出典を調査したところ、ジュリアン・ガデの『建築の諸要素と理論』の図版であるが判明した。

なお、調査にあたって、『建築の諸要素と理論』初版には劇場に関する記述がなかったことから、第 4 版（1915）で確認した。

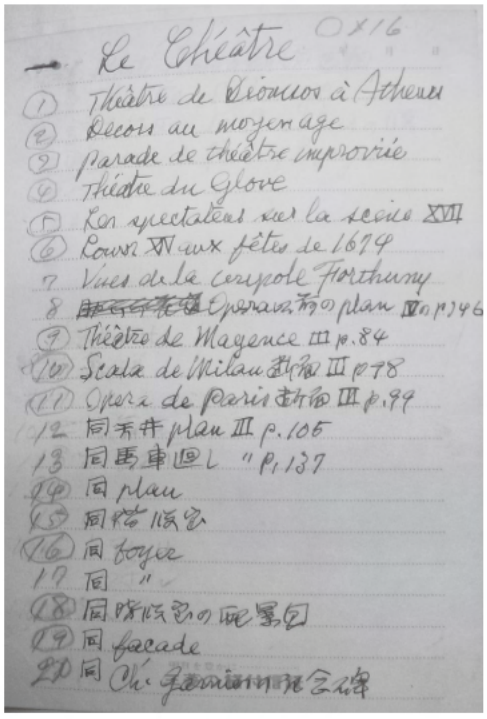


写真 15
ノート裏表紙見返しに添付されたリスト

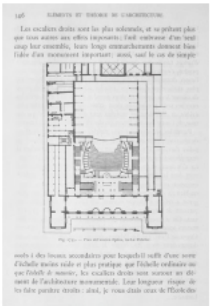


写真 16
オペラ以前のプラン
（参考文献 6）

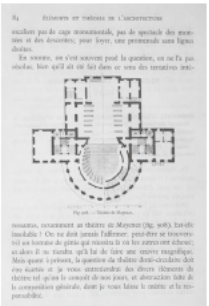


写真 17
マインツ劇場
（参考文献 6）

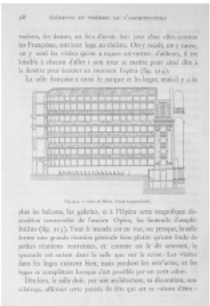


写真 18
ミラノ・スカラ座
（参考文献 6）

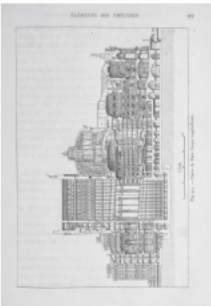


写真 19
パリ・オペラ座
（参考文献 6）

写真 20
パリ・オペラ座天井
（参考文献 6）

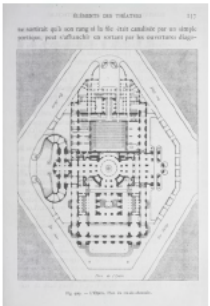


写真 21
パリ・オペラ座馬車廻し
（参考文献 6）

⑧　SYNTHESE

このノートの表紙下部には網戸武夫の事務所社印が押されている。表題下およびノート中表紙に網戸のメモが確認でき、1974 年 11 月 11 日に網戸が中村から預かったことがわかる。中村の晩年の字体であることから、前述までの他のノートとは異なる筆致で記載されている。ところどころのページが破かれており、書き直し等を行ったと思われる形跡が残されている。

本文はノートの右ページ片面のみに記載され、左ページはフランスの彫刻家フランソワ・リュードの略歴記載にのみ使用している。このノートの具体的な目的は不明だが、制作年代から小田急ハルク等で開催された大規模な展覧会「米寿記念　中村建築教育の精神とその展開」に向けて準備された論考やこの展示を記念して制作された書物[註24)]の論考への活用の可能性が考えられる。なお、記載項目タイトルの「Nationalité 国民性」以下の部分は、ノート内にフランス語単語と日本語訳語が併記されていた。

表 13「SYNTHESE」ノート・表題リスト

直筆ノート記載項目	筆者訳・補足等	頁	頁	参考文献
序説　synthèses	－	1	1	不明
François Rude（1784-1855）	フランソワ・リュード	裏		不明
Style	様式	2	3	不明
Caractère	性格	4	4	不明
Décoration	装飾	5	5	不明
Nationalité 国民性	－	6	6	不明
Archéologie 考古学	－	7	11	不明
Stéréotomie 矩規術	－	12	16	不明

B．合紙綴じ製本ノート系

①　東洋

合紙綴じ製本ノートには東洋に関する記述が収められている。「東洋」のノートは他のノートとは異なり、それぞれの表題部分に参考文献の手掛かりとなる記述がある。それらの手掛かりから参考文献の特定を行ったところ、ここでは主に 2 種の雑誌が使用されていた。それぞれの表題と参考文献をリスト化し下表にまとめた。

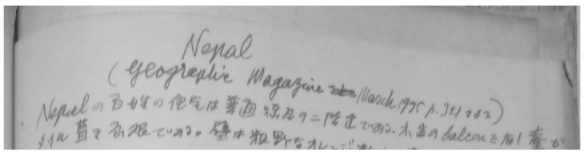


写真 22「ネパール」表題部分

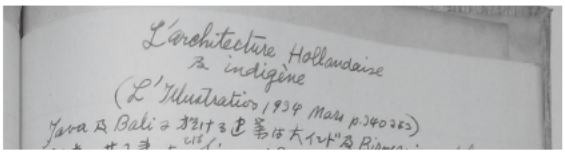


写真 23「オランダの土着建築」表題部分

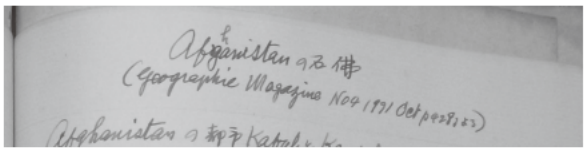


写真 24「アフガニスタンの石仏」表題部分

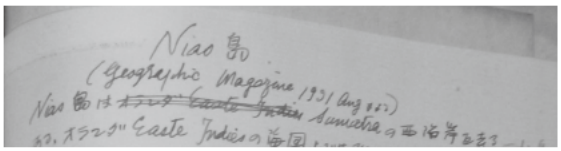


写真 25「ニアス島」表題部分

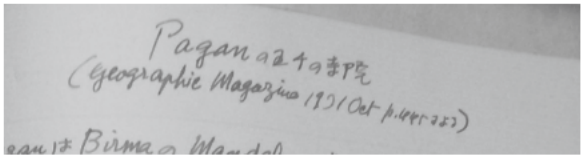


写真 26「パガンの五千の寺院」表題部分

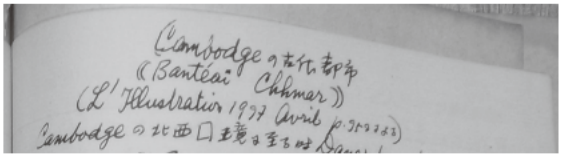


写真 27「カンボジアの古代都市」表題部分

中村の参考文献の一つは、1888 年に創刊されたアメリカ合衆国の雑誌『ナショナルジオグラフィック *The National geographic magazine*』である。このノートでは、1930 年代の特定号の使用が確認できる。中村は多くのフランス語文献を使用していたが、このノートでは、英語文献の使用が確認できる。この雑誌の引用法は、対象の論文の全体の翻訳ではなく抄訳であった。

もう一つは、1843年にフランスで最初に発行された挿絵入り新聞『イリュストラシオン *L'Illustration : journal universel hebdomadaire; or journal hebdomadaire universel*』である。1944年まで発行されたこの新聞は、1931年時点で予約購読が148カ国に及ぶ世界でも有数の新聞であった[註25)]。中村はこの新聞の1930年代の特定号を使用している[註26)]。なお、中村は「『建築学』草稿」ノートにおいて、この雑誌の別冊特集号を使用したことが明らかになっている。

表14「東洋」ノート・表題リスト

直筆ノート記載項目	筆者訳・補足等	頁	頁	参考文献
Nepal	ネパール（ペネロペ・チェットゥッド Penelope Chetwode「ネパール、人里離れた王国」）	1	4	NGM 67 (3)、march 1935、pp.319-352 (321)
L'architecture Hollandaise indigène	オランダ土着建築（ジョルジュ・レモン Georges Rémond「土着建築とマレー諸島のオランダ建築」）	5	6	ILL、No.4751、mars 1934、p.340
Afghanistan の石仏	アフガニスタンの石仏（メイナード・オーウェン・ウィリアムズ Maynard Owen Williams「シトロエン・ハールトのアジア横断探検隊がカシミールに到着」）	7	7	NGM 60 (4)、oct 1931、p.428
Nias 島	ニアス島（メーブル・クック・コール Mabel Cook Cole「ニアス島、世界の果て」）	8	8	NGM 60 (2)、Aug. I931、pp.200-224
Pagan の五千の寺院	パガン（ミャンマー）の五千の寺院（ウィリアム・H・ロバーツ William H. Roberts「パガンの五千の寺院」）	9	10	NGM 60 (4)、Oct. 1931、pp.445-454
Cambodge の古代都市	カンボジアの古代都市（ジョルジュ・グロリエ George Groslier「素晴らしいクメールの街、カンボジアの古都「バンテアイ・チュマール」」）	11	15	ILL、No.4909、avril 1937、p.352

※備考欄の「NGM」は『ナショナルジオグラフィック』、「ILL」は『イリュストラシオン』

② 東洋②

もう一方の合紙綴じ製本ノートにも東洋に関する記述がまとめられている。ノートの使用法は右ページ片面のみを使用するスタイルで、左ページに補足の記載やインド、中国、日本の3か国の建築に関しては大々的に使用して別論考を展開している。

概ね各章の表題には参考文献の手掛かりとなる情報（写真22）が記載されており、この手掛かりからブノワ『建築―中世・近代東洋』（1912）を調査したところ、該当箇所を発見した。また、「インド L'Inde」の表題横の表記「(B.A 辞書による p.233)」（写真23）を手掛かりに調査した結果、『美術百科事典』上巻 p.233 から始まる「第2章インド」の部分の翻訳であることが判明した。

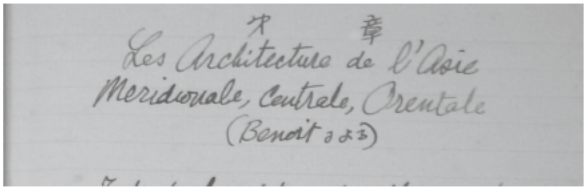


写真28「中央・東アジア建築」表題部分

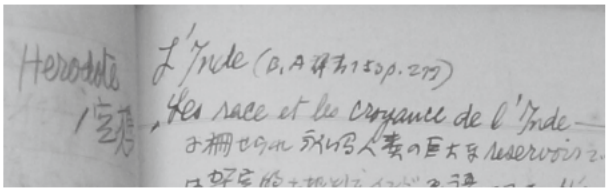


写真29「インド」表題部分

このノートでは、ブノワやウルティックの書物のほか、フランスのデザイナーで美術評論家のモーリス・ピヤール・ベルヌーイ Maurice Pillard Verneuil（1869-1942）の『ジャワの芸術』(1927)[註27)]

やエルンスト・ベーシュマン Ernest Boerschmann（1873-1949）の『中国の建築と風土 La Chine Pittoresque』[註28)]（1923 頃）の翻訳が含まれてた。ベーシュマンは、近代ドイツの建築家で 20 世紀前半に中国を訪問し、数多くの写真やスケッチをもとに中国建築の体系化に取り組んだ最初期の人物として知られている。また、「中国建築」の左ページでは、『美術百科事典』を参照した「中国 Chine」のほか、「シナ建築」[註29)]や「シナ架構」[註30)]といったテーマが取り上げられていたが、文献の特定には至らなかった。

「シナの庭園」では、常盤大定・関野貞による『支那文化史蹟解説』[註31)]（1939）が参照され、外国における第一人者の書物のみならず日本の中国研究の書物を取り上げていた点は特徴的である。『支那文化史蹟解説』の使用を考慮すれば、このノートは 1939 年以降の作成と考えられる。

表 15「東洋②」ノート・表題リスト

直筆ノート記載項目	筆者訳・補足等	頁	頁	参考文献
L'architecture de l'Asie Médiévale、Centrale、Orientale	中央・東アジア建築	1	1	『建築―中世･近代東洋』
L'architecture de l'Inde Brahmaniste et Bouddhiste	インド・バラモン教徒と仏教徒の建築	2	24	『建築―中世･近代東洋』
L'Inde	インド	25	29	『美術百科事典』
L'architecture Birmane	ビルマ建築	30	33	『建築―中世･近代東洋』
L'architecture Siamoise et Laotienne	サイアム（タイ）・ラオス建築	34	36	『建築―中世･近代東洋』
L'architecture Laotienne	ラオス建築	37	39	『建築―中世･近代東洋』
L'architecture Khmère	クメール建築	40	49	『建築―中世･近代東洋』
Lao Thai	ラオ・タイ	50	50	不明
L'architecture en Indo-Chine et en Indonésie	インドシナ・インドネシア建築	51	51	『建築―中世･近代東洋』
L'architecture Chame	シャム（タイ）建築	52	53	『建築―中世･近代東洋』
L'architecture Javanaise	ジャワ建築	54	57	『建築―中世･近代東洋』
Architecture et Plastique Formation d'un Style Indo-Javanais	インド・ジャワ様式の建築と造形	58	71	『ジャワの芸術』
L'architecture dans la Haute-Asie	高地アジア建築	72	76	『建築―中世･近代東洋』
L'architecture Tibétaine	チベット建築	77	82	『建築―中世･近代東洋』
L'architecture Chinoise	中国建築	83	97	『建築―中世･近代東洋』『美術百科事典』他
L'architecture Chinoise	中国建築	98	120	『中国の建築と風土』
シナの庭園		121	121	『支那文化史蹟解説』
L'architecture Japonaise	日本建築	122	128	『建築―中世･近代東洋』『美術百科事典』

C．ダブルリング綴じノート系

①　V_Architecture Chinois 他

このノート表紙の「V」という記載から、このノートが何らかの連続するノートの第 5 冊目を意図していることが想定される。表紙には「Architecture Chinois」のほか、「Huns」などの記載が確認でき、前述の「東洋②」ノートとの連続性が想起される。ノートは、右ページに本文をペン書きするスタイルがとられている。下表にはノート内に記載された表題をまとめた。

いくつかの項目が「東洋②」と重複していたため、両者の比較を試みた。その結果、「東洋②」で参照されたブノワ『建築―中世・近代東洋』（1912）の翻訳であることが判明した。

表 16「V_Architecture chinois 他」ノート・表題リスト

直筆ノート記載項目	筆者訳・補足等	頁	頁	参考文献
Architecture Chinois（続き）	中国建築（続き）	1	3	『建築―中世･近代東洋』
Huns	フン族	4	5	Larousse
Architecture au Turkestan oriental	東トルキスタン建築	6	7	『建築―中世･近代東洋』
Chame	シャム（タイ）	8	9	『建築―中世･近代東洋』
Architecture Khmère	クメール建築	10	14	『建築―中世･近代東洋』
Architecture Egyptienne	エジプト建築	15	34	『建築―古代』 『芸術史授業―古代の芸術』

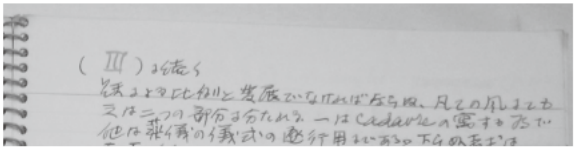


写真 30　ノート一枚目

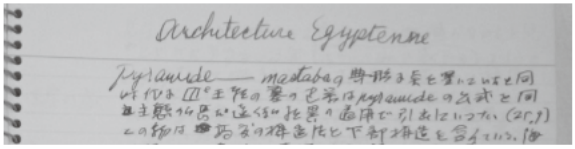


写真 31　「エジプト建築」始まりページ

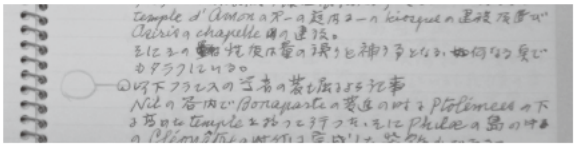


写真 32「エジプト建築」参考文献の切り替わり位置

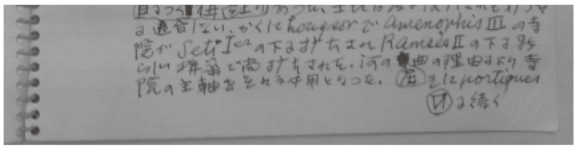


写真 33　ノート最終ページ

また、「エジプト建築」では、ブノワの『建築―古代』p.43 の「ピラミッド La Pyramide」の翻訳から始まり（写真）、ブノワの「エジプト建築」項目の冒頭に遡り、その後、ブノワの書物とは異なる文献が参照されている（写真）。「エジプト建築」の後半は、建築家でエコール・デ・ボザールの建築史講座を 1891 年から 1916 年にかけて担当したルシアン・マーニュ Lucien Magne (1849-1916) の『芸術史授業―古代の芸術 *Leçon sur l'histoire de l'art - L'art dans l'antiquité*』(1909)（参考文献 8) の翻訳であった。「『建築学』草稿」ノートで使用されたマーニュの文献とは異なるものだが、マーニュの一連の書物は中村理論の背景を考える上で重要な書物といえるだろう。また、ノート最終ページには、「VI に続く」との記載を確認でき、さらに連続するノートの存在が示されている。

② VI_Architecture Egyptienne

このノートの表紙の「VI」という記載から、連続するノートの第 6 冊目を意図していることが読み取れる。表紙の「Architecture Egyptienne（エジプト建築）」の記載と「V_Architecture chinois 他」の最終ページに記載された「VI に続く」から、前出の「V_Architecture Chinois 他」ノートの連続である可能性が高い。

ノートは、右ページに本文をペン書きするスタイルがとられている。下表にはノート内に記載された表題をまとめた。使用された参考文献は、「V_Architecture Chinois 他」ノートの「エジプト建築」と同一で、マーニュの『芸術史授業―古代の芸術』が参照されている。

表 17「VI_Architecture Egyptienne」ノート・表題リスト

直筆ノート記載項目	筆者訳・補足等	頁	頁	参考文献
Architecture Egyptienne	エジプト建築	1	4	『芸術史授業―古代の芸術』
白紙		5	5	
Architecture Egyptienne	エジプト建築	5	9	『芸術史授業―古代の芸術』

5．おわりに

以上から、大阪歴史博物館蔵の中村直筆ノート群の記述は、主にウルティックの『美術百科事典』上下２巻、ブノワの２冊『建築―古代』、『建築―中世･近代東洋』を基盤としていたことがわかる。これらの書物は中村の既往研究ではほとんど言及されてこなかった。本研究において中村理論の基盤となった新たな参考文献を発見した。その他の参考文献では、ノート表題にもなったアルノーや図版引用が確認されたガデの理論書が確認でき、マーニュの書物も使用されていた。彼らはいずれもパリのエコール･デ･ボザールの建築セクションで教鞭を執った人物で、彼らの書物は「『建築学』草稿」ノートにおいても活用されており、中村にとってエコール・デ・ボザールでの経験は理論のよりどころであったことが改めて確認できた。一方、1961 年刊行の書物の使用も確認され、中村がパリ留学時の経験のみに頼っていたわけではなく、継続的にフランスの書物から新たな知識を吸収していたことが判明した。本研究で対象としたノート群は、すべてが横浜での教員時代に作成されたものではなく、一部は教員時代を終えてからまとめられた可能性が考えられる。さらに特筆すべきは、写真１に記載された５冊中の３冊が本研究で対象としたノートの参考文献として使用されていたことで、中村の理論基盤には写真１に記載された書物が据えられていたのだろう。他方、今回特定できなかった「Les Théâtres」の東西の劇場に関する文献や「東洋②」の中国建築に関する文献については、今後さらなる調査が必要である。

表 18　中村直筆ノートの主な参考文献

種別	主な参考文献名	該当直筆ノート
文献①	ルイ・ウルティック『美術百科事典』（上・下巻）	伝①、伝②、Gothique、Renaissance ①、Renaissance ②、東洋②
文献②	フランソワ・ブノワ『建築―古代』	西洋建築②、西洋建築③、V_Architecture chinois
文献③	フランソワ・ブノワ『建築―中世・近代東洋』	東洋建築①、東洋②、V_Architecture chinois
文献④	ジュリアン・ガデ『建築の諸要素と理論』	Arnaud、Les Théâtres
文献⑤	ルシアン・マーニュ『芸術史授業―古代の芸術』	V_Architecture chinois、VI_Architecture Egyptienne
文献⑥	エドワー・アルノー『建築・建設土木講義』	Arnaud
雑誌①	『ナショナルジオグラフィック』	東洋
新聞①	『イリュストラシオン』	東洋

参考文献

1）網戸武夫『情念の幾何学』建築知識社、1985

2）林要次『近代日本におけるフランス建築理論と教育手法の受容：中村順平の理論と教育を中心として』横浜国立大学、2015

3）Edouard Arnaud, *Cours d'architecture et de construction civile*, Imprimerie des Arts et Manufactures, 1928

4）François Benoit, *L'architecture – Antiquité*, H. Laurens, 1911

5）François Benoit, *L'architecture – L'Orient Médiéval et Moderne*, H. Laurens, 1912

6）Julien Guadet, *Eléments et théorie de l'architecture, 4éme éditions*, Librairie de la construction moderne、1915（第 4 版）

7）Louis Hourticq, *Encyclopédie des Beaux-Arts*, Librairie Hachette, 1925

8）Lucien Magne, *Leçon sur l'histoire de l'art – L'art dans l'antiquité*, Librairie Centrale des Beaux-Arts, n.d., 1909

註

1）1925 年設立当時、中村は「木炭画」科目も兼任。1932 年度から渡邊郁一が「木炭画」の担当教官となる。
2）大阪歴史博物館館蔵図面資料は、横浜の学生による作品群と中村の留学期の作品群の 2 つに大別できる。
3）参考文献 1、p.336
4）大阪歴史博物館『館蔵資料集 5　建築家・中村順平』大阪歴史博物館、2013、p.38
5）中村順平「建築学」『建築世界』建築世界社、第 19-24 巻（1925-1930）及び第 26-31 巻（1932-1937）
6）中島久男「日本におけるエコール・デ・ボザール教育の導入について」『学術講演梗概集．F、都市計画、建築経済・住宅問題、建築歴史・意匠 1987』pp.771-772、日本建築学会、1987
7）林要次「中村順平にみるエドワー・アルノーの影響：近代日本におけるフランス建築理論の受容に関する研究 その 1」『日本建築学会計画系論文集』vol.79、No.699、pp.1205-1210、日本建築学会、2014
8）参考文献 1、p.336
9）日本紙パルプ商事株式会社『百三十年史』（1975 年 12 月）、渋沢社史データベース（ウェブサイト）
https：//shashi.shibusawa.or.jp/details_basic.php?sid=2870（最終確認：2020 年 12 月 27 日）
10）中村順平「バロック・ロココ」『世界建築全集第 8：西洋 第 3（ルネサンス、バロック、ロココ、19 世紀前半）』平凡社、1962、pp.52-63
11）Edouard Arnaud, *Cours d'architecture et de construction civile*, Imprimerie des Arts et Manufactures, 1928
12）ジー・ガデー、長野宇平治訳『建築士及其職責』建築世界社、1929
13）林要次「中村順平の直筆ノートにみる建築家職能観の源泉」『2020 年度日本建築学会大会（関東）学術講演梗概集（建築歴史・意匠）』日本建築学会、2020
14）Louis Hourticq, *Encyclopédie des Beaux-Arts*, Librairie Hachette et cie, 1925
15）Bernard Jacqueline, *L'Italie et ses merveilles*, Hachette, 1961
16）中村順平「パリ美術院」『新建築』1968 年 2 月号～ 8 月号、新建築社、1968
17）François Benoit, *L'architecture – L'Occident médiéval du Romain au Roman*, H. Laurens, 1933
18）François Benoit, *L'architecture –L'Occident médiéval romano-gothique et gothique*, H. Laurens, 1934
19）Charles Garnier, *Le théâtre*, Librairie Hachette et cie, 1871
20）Lucien Dubech, *Histoire Générale Illustrée du Théâtre*, Librairie de France, 1931
21）Gueorgui Kreskentievitch Loukomski, *Les Théâtres anciens et modernes*, Firmin-Didot et Cie, 1935
22）Pierre Vago (éd), *Le Spectacle*, L' Architecture d' aujourd' hui 9me année No.9 Septembre, L' Architecture d' aujourd' hui, 1938
23）その他の調査対象：Emile Trélat, *Le Théâtre et L'Architecte*, A. Morel et Cie, 1860., Germain Bapst, *Essai sur l'histoire du théâtre*, Librairie HACHETTE et Cie, 1893., André Bloc (éd), *les salles de spectacles, L' Architecture d' aujourd' hui 4e année No.7 octobre*, L' Architecture d' aujourd' hui, 1933., Pierre Vago (éd), *Studio et Cinéma, L' Architecture d' aujourd' hui 9e année No.4 avril*, L' Architecture d' aujourd' hui, 1938., Jan Doat, *Architecture et décors de théâtre*, Editions Billaudot, n. d. (1944).
24）網戸武夫編『中村順平先生米寿記念 - 中村建築教育の精神とその展開 - 日本古典建築遺構建築図画展に寄せて』近代家具、1975
25）木下賢一「フランスの挿し絵入り新聞『イリュストラシオン』のコレクションについて」『明治大学図書館紀要 12』明治大学、2008、pp.178-183
26）横浜国立大学附属図書館 OPAC で 1930 年から 1938 年の 13 の号（4577 号、4623 号、4637 号、4717 号、4719 号、4751 号、4857 号、4882 号、4909 号、4912 号、4950 号、4971 号、4982 号）の所蔵が確認できた。ここには、「東洋」で使用された 4751 号と 4909 号が含まれている。その他の号も中村が選別して入手した可能性があり、今後の詳細な調査が必要だろう。
27）Maurice Pillard Verneuil, *L'Art à Java - Les Temples de la Période Classique Indo-Javanaise*, Librairie Nationale d'Art et d'Histoire G. Vanoest, 1927
28）Ernest Boerschmann, *La Chine Pittoresque*, Librairie des arts décoratifs, n.d.（参照：国立情報学研究所ディジタル・シルクロード・プロジェクト『東洋文庫所蔵』貴重書デジタルアーカイブ *Baukunst und Landschaft in China* (Verlag Von Ernst Wasmuth A.G., 1926) http：//dsr.nii.ac.jp/toyobunko/III-2-B-233/（最終確認：2020 年 12 月 27 日）
29）「Chinese art による p.20」との記載から、Stephen W. Bushell, *Chinese Art*, H. M. Stationery Office, 1905., Laurence Binyon, *Chinese art*, K. Paul, Trench, Trubner, 1935., Robert Lockhart Hobson, *Chinese art*, Benn, 1952 を調査したが、特定には至らなかった。
30）「（中国建築 p.10）」等の記載から、伊藤清造『支那の建築』大阪屋号書店、1929、塚本靖『支那建築：世界建築集成 上・下巻』建築学会、1932、関野貞「支那の建築と芸術」岩波書店、1938、伊藤清造『支那及満蒙の建築』大阪屋号書店、1939 を調査したが、特定には至らなかった。
31）常盤大定、関野貞『支那文化史蹟解説』法蔵館、1939